

岩手のジャズ喫茶と同時復活



ジャズ喫茶ちぐさの前に立つ藤沢さん(右)と理事の横山良一さん(横浜市中央区野毛町で)

復興を果たす。藤沢さんらはその後も、バザーで集めた20万〜30万円やレコードを届けたり、避難所でジャズ喫茶を開いたりして被災地支援を続けた。ちぐさの営業再開に向け、被災した女性1人をスタッフとして雇用し、提供するメニューに被災地の食材を取り入れる準備を進めた。そして12年3月11日、「h. イマジン」との同時

東日本大震災11年
ジャズファンに「おやじ」と慕われた吉田衛さんが1933年に創業。世界的ミュージシャンの渡辺貞夫さんらも若い頃に通った。吉田さんが94年に亡くなった後も、家族や常連客らが営業を続けたが、周辺再開の流れのなかで、2007年にいったん閉店。12年から、2008年ほど離れた同

の代表理事、藤沢智晴さん(75)は「あきらめないぞというパワーを感じた。俺たちはいったい何をやっているんだと思った」と振り返る。震災発生の2か月後、ちぐさの女性スタッフら3人が富山さんを訪ね、バッテリー式のポータブルプレイヤーとLPレコードを届けた。4人は晴れ渡った空の下、津波に流された店の土台の上でジャズを聴いた。富山さんは「知らない方がレコードを届けてくれて、がれきの中で聴いたジャズはドラマチックだった」と懐かしむ。

東日本大震災11年

じ野毛地区の一角で、有志で営業を再開した。この再スタートに力を与えてくれたのが、11年3月11日の震災で被災した岩手県陸前高田市のジャズ喫茶「h. イマジン」だった。

「h. イマジン」の富山勝敏さん(80)が、津波が襲った後のがれきの上でレコードを手に復活を宣言する姿が、報道で伝えられていた。

現存する国内最古のジャズ喫茶として知られる横浜・野毛の「ちぐさ」が11日、東日本大震災で被災した店舗との「同時復活」を果たしてから10年の節目を迎える。この春から店の建て直しを進め、来年の3月11日には、博物館とライブハウスの機能を備えた「ジャズミュージアムちぐさ」へと生まれ変わる予定だ。(日下翔己)

震災発生の2か月後、ちぐさの女性スタッフら3人が富山さんを訪ね、バッテリー式のポータブルプレイヤーとLPレコードを届けた。4人は晴れ渡った空の下、津波に流された店の土台の上でジャズを聴いた。富山さんは「知らない方がレコードを届けてくれて、がれきの中で聴いたジャズはドラマチックだった」と懐かしむ。

「ちぐさ」最古で、最新

大規模改修へ文化つなぐ決意

その店も築70年超。藤沢さんは「ジャズ喫茶は今や絶滅危惧種。この機会を逃すと、すぼむ一方」と大規模改修を決意した。歴史的資料を保管する博物館とライブハウスを上層階につくり、下層階にはジャズ喫茶ちぐさを再現する計画だ。総工費は約1億円。自己資金や借入れのほか、「横浜野毛地区まちづくりトラスト」に補助金を申請する。さらに今月から、1000万円を目標に募金を始め、レコードやオーディオ機器などの寄贈も呼びかけている。工期は5月〜来年2月、完成は「記念日」の来年3月11日を予定している。建て替え中は仮設店舗で営業するという。問い合わせは「ジャズミュージアムちぐさファンド事務局」の担当者(090・6111・1751)へ。

「ジャズミュージアムちぐさ」のイメージ(ジャズ喫茶ちぐさ提供)

完成予定は 来年3・11



「ジャズミュージアムちぐさ」のイメージ(ジャズ喫茶ちぐさ提供)

ジャズ登竜門ちぐさ賞のサクソ奏者 中根 佑紀さん(22)

・現存する最古のジャズ喫茶「ちぐさ」(横浜市)が主催するジャズ界新人の登竜門「第8回ちぐさ賞ライブ選考会」で、テナーサクソ奏者として優勝した。記念のCDとLPが16日から発売され、プロデビューする。

名古屋市出身の早稲田大文学部4年生。幼稚園のころから音楽教室に通い、中学3年の時にジャズの課題曲「A列車で行こう」でサクソの音色に魅せられた。高校のビッグバンド部でテナーサクソ

を習得。早大ではモダンジャズ研究会とハイソサエティ・オーケストラで腕を磨いた。

米国のサクソ奏者ソニー・ロリンズの陽気さを愛し、ニューヨークのクラブでライブ録音された名盤「ヴィレッジ・ヴァンガードの夜」にあやかり、CDの収録は「客と一体となった空気感、熱量を伝えたい」と横浜でカルテットを率いてライブで行った。

収録9曲のうちオリジナルが5曲あり、タイトルは新しい挑戦者との決意を込めて



「NEW - COMER a letter to someone」。「クリエイティブな曲とスリリングな演奏でジャズの壁を壊し、その良さをもっと知ってもらいたい」と夢は広がる。(野呂法夫)

2022.3.8

横浜・野毛 現存 日本最古のジャズ喫茶

現存する日本最古のジャズ喫茶である横浜・野毛の「ちぐさ」(横浜市中区)が、創業90周年を迎える2023年にジャズミュージアムとして生まれ変わる。建物の老朽化に伴い建て替えるもので、施設内には、終戦直後から創業店主の吉田衛さん(故人)が営んだ店舗を再現し、自由にライブができる空間も設ける。店舗を運営する一般社団法人「ジャズ喫茶ちぐさ・吉田衛記念館」はファン্ডを募集、11日から建て替えに向け市民の寄付を募る。

(柏尾 安希子)

ファンの支えで存続

ちぐさが野毛1丁目に開店したのは1933年。大學生らから人気を集めたが、戦争が始まるとジャズは敵性音楽として禁止され、吉田さんも出征した。46年に帰還したが、店は6千枚以上のレコードとともに焼失していた。

だが、常連客やミュージシャンらが隠し持っていたレコード計千数百枚を持ち、常連客らが営業を続けたが、地域の開発計画で2007年に閉店した。所蔵数で日本最多とされる54枚の

寄られた。また、吉田さんは米軍が戦線の兵士慰問用に制作したレコード「Vデイスク」を収集し、48年に店を再開。秋吉敏子さんや渡辺貞夫さん、日野皓正さんら世界的プレーヤーも通い詰めた。

吉田さんが94年、81歳で亡くなると妹の孝子さんが常連客らが営業を続けたが、地域の開発計画で2007年に閉店した。所蔵数で日本最多とされる54枚の



ジャズミュージアム「ちぐさ」の完成予想図(山本理顕設計工場の提供)

創業90周年の来年

「ちぐさ」ミュージアムに

Vディスクや、一流ジャズプレーヤーの書簡、写真、店の備品などは「野毛地区街づくり会」が受け継いだ。そしてちぐさを愛する人たちが社団法人を設立し、12年に野毛2丁目店を再開した。

後世に引き継ぐため、再開後10周年を迎えたが、建物は築70年を超え、市の調査で大地震に耐えられないと分かった。それを契機に、ミュージアムとしての再生を決めた。

新しい「ジャズミュージアム・ちぐさ」の設計は、横浜の世界的建築家、山本理顕さんが担った。鉄筋コンクリート2階建てで、施設内には戦後に吉田さんが再開した店を再現。オーデイオ装置やレコードの数々、調度品、看板などは当時のものを使用する。音響は、国内外の一流ホールなども手掛ける企業、永田音響設計が手掛ける。

レコードや書簡、写真などもデジタルアーカイブとして整備し、バーチャル空間で体験できるようにする。また若いミュージシャン育成のため、ピアノなどを設置しライブ空間を開放。外観はガラス張りです上からも楽しめるようにする。

現在の店舗は4月10日で閉店するが、惜しむ声も相次ぐ。8日からの最後の3日間、「ファン感謝デイ」そして思い出を語り合い、コーヒーやビールを格安で提供するほか、夜はライブも行われる予定だ。

問い合わせは、ちぐさ内のファン্ড事務局045(315)2006。

建て替えへ寄付募る

総工費はおよそ1億円。自己資金や銀行融資、補助金申請のほか、ファンズを募る。1口1万円以上で、ジャズの歴史的資料となるようなレコードや著作物、写真などの寄付も求める。受け付けは11日からで、期間は23年2月まで。

運営法人の代表理事で、野毛で飲食店を営む藤澤智晴さんは「ちぐさを支える人たちは高齢化している。今のうちに、後に引き継げるよう建て替える。展示と収集を通して横浜の文化財としてジャズを位置付けられたら」と意気込む。



ミュージアム建て替えへの準備を進める藤澤さん(左)ら＝横浜市中区

被災ジャズ喫茶に励まされ

現存する日本最古のジャズ喫茶といわれる横浜・野毛の「ちぐさ」は一度、店をたたんだことがある。再出発を果たした背景には、11年前の東日本大震災があった。いま、ライブができ、博物館の機能も備えたジャズミュージアムに生まれ変わろうとしている。



戦前に開業 横浜「ちぐさ」

津波に流された店の前で男性がレコードを手をたたずんでいた。震災直後に掲載された新聞記事。岩手県陸前高田市でジャズ喫茶「h・イマジン」を営む、富山勝敏さん(80)だった。

震災の1年ほど前に火事で店が焼失したこと、再開して

と見なされたジャズレコードが没収され、店は45年の横浜大空襲で全てを失った。戦後に再建したが2007年、マンション建設のため立ち退くことになった。10年に復活イベントがあったが、当時はその後の見通しは立っていなかった。記事を読んだ新村さんは「辛いことを乗り越えて、何度でも復活しようとするスピリットに共感した」。



横浜・野毛地区に店を構えるジャズ喫茶ちぐさ



避難所でレコードを確認する富山さん(右)。新村さんたちが送り届けた＝2011年5月、岩手県陸前高田市、新村さん提供

立ち退き後復活 来春ミュージアムに



新村 満子さん

イベントに関わった仲間とともに、被災地のためにできることはないか、考え始めた。11年4月、新村さんら野毛で店を開く人たちがチャリティーイベントを開いた。イベントで集まった30枚のレコードと寄付金を翌5月、富山さんが避難する中学校の体育館に届けた。富山さんとともに、店があった場所を訪れた。青空の下、がれきが残るその場所で、横浜から持ち込んだポータブルプレーヤーでジャズのレコードを流した。富山さんは「こんな状況だけど、音楽って素晴らしいな。耳を傾けている間は、つらいことを忘れることができた。富山さんとの出会いを機に、ちぐさも復活に向けて再び動き出した。h・イマジンとちぐさ。二人三脚で同時復活をめざした。

ちぐさのスタッフが陸前高田市を訪ね、横浜から機材やレコードを持ち込んだ。富山さんと一緒に開いた「出張ジャズ喫茶」。オンラインで陸前高田と横浜を結んだ。復興と店の復活に向けて励まし合った。

震災からちょうど1年後の12年3月11日。ちぐさは野毛で、h・イマジンは大船渡市で飯店舗として、復活を遂げた。「よくここまでこぎ着けられましたね」。当日はオンラインで二つの店をつないで互いに復活を喜んだ。「それぞれの拠点がまたできたことは、素直にうれしかった」と新村さんは話す。

二つの店の交流は続いた。新村さんは引き続き富山さんの店や仮設住宅に足を運んだ。h・イマジンや東北の街が復興していく様子をちぐさのイベントで伝えた。新村さんは「富山さんはいつ会ってもポジティブで不屈の精神の持ち主。その姿にこちらが勇気をもらい、まだまだやれると思わせてくれる」と話す。

震災前にh・イマジンがあった場所はかさ上げされ、19年に店をそこへ戻した。「全く見えず知らずの人に支えられ、そのパワーですっと続いている。あつという間に時間が過ぎた」。富山さんもまた、ちぐさをはじめとする周囲の力に支えられてきた。

ちぐさは来年、ライブ演奏も楽しめる「ジャズミュージアム・ちぐさ」として開業をめざす。1千万円を目標に寄付を募り、歴史的資料となるレコードや写真などの寄贈も呼びかけている。オープン予定は来年の3月11日。新村さんは「震災を忘れないための日。この日にリスタートしたい」と話した。(足立優心)



【2022.3.16】

日本最古のジャズ喫茶「ちぐさ」(横浜市中区)が、創業90周年を迎える2023年に「ジャズミュージアム・ちぐさ」(仮称)として生まれ変わる。立地する野毛の人たちや常連客の手でファンドが設立され、整備に向けた寄付活動も始まった。

「ちぐさ」建て替え

関心を持つ市民の裾野が広がり、ジャズが地域の財産として一層盛り上がることを期待したい。店は1933年に吉田衛さん(故人)が創業した。戦争が始まるまで吉田さんは出征し、ジャズは敵性音楽となった。店舗は横浜大空襲で焼失したが、吉田さんが帰還後の48年、常連客やジャズプレーヤーたちが隠し持っていたレコードを持ち寄るなどし、店の再建がかなった。

吉田さんの死去後は、妹の孝子さんが後を継いだ。地域の開発計画で2007年に閉店した後、野毛の人たちや常連客が協力し、貴重なレコードや店の備品などを廃棄せずに保管した。

「ちぐさ」を愛する人たちの手で社団法人が設立され、12年に店舗を再開すると、ジャズファンたちが再び集まった。一方で築70年となった店舗建物は安全性に不安があり、柱を一本入れたものの建て替えざるを得なかったという。

歩みを振り返れば、火を絶やしてはならないという市民らの不断の支えが、「ちぐさ」を存続させてきたと言えよう。関わってきた人たちの高齢化が進む中、地域の財産として次代に継承するためにもミュージアム

地域の文化財に育って

ムを設置が必要という判断に至ったことも喜ばしい。

ミュージアムの設計は、自身も店に親しんだ横浜の設計士、山本理顕さんが担当する。吉田さんが戦後に再開した店舗を忠実に再現した空間で名曲を奏しめるほか、音源や写真などの貴重な資料を集め、デジタルで体験できるようにするという。若手演奏家に発表の場を提供するなど人材育成も意識する。

脈々とつながれてきた「ちぐさ」のバトン。地域の文化財として、さらに育てていく取り組みを応援していきたい。

神奈川県全域・東京多摩地域の地域情報紙

会社案内 | IR情報 | 事業案内 | 採用情報



ホーム	横浜	川崎	相模原・東京多摩	県央
-----	----	----	----------	----

中区・西区版

掲載号：2022年3月17日号



第8回ちぐさ賞

ライブ録音でリリース

中根佑紀、レコード・CD発売
(文化)

優秀な新人ジャズミュージシャンを発掘する2021年度の「ちぐさ賞」(第8回)を受賞した中根佑紀さん(テナーサクソ)のレコードとCDが、3月17日に発売日を迎える。



レコードのジャケット

賞受賞を記念したもので、タイトルは『NEW-COME R a letter to someone』(アナログレコード3300円、CD2200円/すべて税別)。

中根さんは名古屋市出身で早稲田大学に通う。目指すジャズは50~60年代のアコースティックの4ビートで正統派。レコーディングは「客と一体となってライブの空気感、熱量を伝えたい」と客を入れたライブ録音を選んだ。発売元のちぐさレコードは「大ベテランの中村誠一が加わった、ファンキーでブルーなサクソ2管のユニゾンが聴きどころです」と説明する。

16日から各CDショップで発売、ネットストアで配信開始。

K-Person 山本理顕

やまもと・りけん
建築家。1945年北京生まれ、横浜市神奈川区育ち。同区に「山本理顕設計工場」を構える。94年「緑園都市駅前商業街区計画」でアーキテクチャー・オブ・ザ・イヤーなど受賞。2002年「公立ほこだて未来大学」で日本建築学会作品賞。「横浜賀賀美術館」で07年県建築コンクール最優秀賞と10年日本建築家協会賞。国内外の建築を手がけ、県内では「横浜市立大学 YCU スクエア」（横浜市）も。



生まれ変わる「ちぐさ」
自由な音楽楽しむ空間に

山本理顕

ジャズの街・ヨコハマの財産ともいえる日本最古のジャズ喫茶「ちぐさ」（横浜市中区）。野毛で創業した同店は、90周年を迎える2023年に建て替えられ「ジャズミュージアム・ちぐさ」『写真左』に生まれ変わる。新たに誕生する施設の設計を担った。「ちぐさ」はあがれの存在だったと語り、「高校のときか



（山本理顕設計工場提供）

ら知っていたがジャズって難しそうです。詳しい人が集まっている感じがして、リクエストをしても「こんな曲を聴く」と言われすぎて、敷居が高かった」と、笑いながら振り返る。だが、テート（実際には「格好をつけて行きました。設計のきっかけは、20年夏に横浜市のカジノを含む統合型リゾート施設（IR）の構想に反対し、カジノを含まない提案を提案したことだった。その際、「ちぐさ」の運営法人の代表理事で、野毛の飲

食店主でもある藤澤智さんと出会い、まちづくりへの考え方が共鳴した。「テーマパーク型の開発は限界を迎えている」という話しているうち、本当にちぐさの人が来てくれる街づくりに向けて、「ちぐさ」のことを一緒に考えてくれないかと頼まれた。非常にうれしかったという。

現在の「ちぐさ」の建物は築70年を迎え、安全面から建て替えが必須だった。どんな施設にするか。考えるにあたり頭に浮かんだのが、米・シカゴでの経験だった。「5年ほど前にジャズの生演奏の店に行ったが、全然静かじゃない。にぎやかに演奏している人が知り合いたと顧客が声をかけていた。日本のように深い知識とともにジャズを聴くのではなく、とても楽しんでいた。音楽は、こういうふうに関わりたい。ジャズってそういうものだと思った」と話す。

ミュージアムは、路上からも演奏が楽しめるようにガラス張りにした。若手演奏家が育つ場となることを願い、「ピアノなどを置いて自由にライブ演奏ができる空間を確保すべく、また、「ちぐさ」への創業当時の店舗を再現する部屋もつくる。設計にあたって創業者の故・吉田衛さんの思いをあらためて感じたと語り、

「1933年の創業当時ドイツでナチスが政権を取り、日本は満州事変で国際的に孤立。吉田さんは、敵対国だった米文化とは何かを考えた。こういう文化、自由な音楽を持った人たちが紹介したかったのではないかと」
吉田さんの出征で店は中断したが、敗戦後に米軍の貴重なレコードなどを集めて再開し、世界のジャズレーヤーも足を運ぶまでになった。「横浜の重要な文化財でしょう」

記者の一言

野毛のランドマークともいえるミュージアムの設計を通じ、あらためてその街のあり方に感動を受けたという。開市から始まり、例えば野毛大道芸など店主らの多彩な取り組みによって、今や若者からも集う人気エリアに育った。そのような街で「ちぐさ」は地域の文化を形作る大切な要素だった。「ここにあるのは住民自治。自分たちで秩を築きつくり運営する。ちぐさの建て替えも、その象徴だと思ふ。現在、ミュージアムの建て替え資金を募るファンが設立され、市民に広く支援を募っている。「文化遺産にしたい街。東京ではどんなふうになっている。こういう場所を守ることは本当に大切だ」。ミュージアムは、その要となる。

広域

MMでジャズの調べを ミュージアム「ちぐさ」の音響再現

現存する日本最古のジャズ喫茶「ちぐさ」の音響設備などを再現した施設が、横浜・みなとみらい21(M21)地区にオープンした。4月に一時閉店し、ジャズミュージアムとして生まれ変わる来年までの仮設展示



音響設備が並ぶフロアにピアノの軽快な調べが響くジャズミュージアム「ちぐさ」の仮設展示スペース
|| 横浜市西区

スペース。所蔵レコードの軽快なジャズの調べが響くフロアで、優雅な時間を楽しめる。入場無料、来年2月28日まで。
1933年に故吉田衛さんが横浜・野毛で創業し、閉店と常連客らによる再開

を重ねた「ちぐさ」。渡辺貞夫さんや日野皓正さんら世界的プレーヤーが通ったことでも知られ、ジャズファンの「聖地」として親しまれてきた。ただ、築70年超の店舗は安全性が不安視され、来年の創業90周年を機に次代へ継承するミュージアムとして再出発する。
M21地区グランモール公園1階「クロス・パティオ」内で5月1日にオープンした仮設スペースには、吉田さんが愛用していた音響システムや約6千枚のレコードをはじめ、著名プレーヤーとの交流記録や写真を展示。コーヒーを飲みながらジャズの歴史を語るトークショーやワークショップも企画している。
ミュージアム館長の筒井之隆さん(78)は「若い世代も集まるみなとみらい21地区で、ちぐさの大切なアイカブに触れてジャズの魅

力を味わってほしい」と来場を呼びかけている。
新施設建設に向けた支援金も募集中。詳細は、ちぐさホームページで。
(香川 直幹)
|| 動画はウェブサイト「カナルコ」に

▼読売新聞朝刊 2022年5月3日付

「ちぐさ」仮店舗オープン 横浜

店舗建て替えのため、先月10日に一時閉店した日本最古のジャズ喫茶「ちぐさ」が、横浜市西区みなとみらいのグランモール公園に仮設店舗をオープンした。オーディオシステムやレコードなどを展示し、閉店前と同じ音楽やコーヒーを楽しめる。

店内には、約6000枚のレコードや第2次世界大戦中に米軍が兵士慰問のために戦地へ送ったレコード盤「V-ディスク」などが並べられている。半世紀前から使われているオーディオシステムで聴くこともできる。

「ちぐさ」に約6年通っているという同市保土ヶ谷区の石崎邦人さん(70)は「仮設店舗も広々としていていい。会社も近いので週2回は通おうと思う」と笑っていた。

仮設店舗は来年2月28日まで。

見る・遊ぶ 買う 学ぶ・知る

2022.05.06

ジャズ喫茶ちぐさから「ジャズミュージアム・ちぐさ」へ みなとみらいでプレオープン

ちぐさみらい



4月に野毛店での営業を終えた日本最古のジャズ喫茶として知られる「ちぐさ」が、5月1日からグランモール公園1階の「クロス・パティオ」の「グリーンスポット」（横浜市西区みなとみらい2）で「ジャズミュージアム・ちぐさ」プレオープンの仮設展示を開始した。

🎹 グランドピアノ 「ジャズミュージアム・ちぐさ」プレオープン

創業店主の吉田衛さんの時代から使用していたオーディオシステムと約6000枚のレコードや、貴重なV-ディスクなどを展示。亀吉敏子さん、渡辺貞夫さん、日野皓正さんなどの音楽家たちが勉強のために通っていた旧ちぐさの歴史を背景に、ジャズの歴史を語るトークショーやジャズミュージアムについてのワークショップなど、イベントの展開も予定する。

展示空間内には、ちぐさオリジナルブレンドを開発したキーコーヒーのセルフサービスコーナーを設けるとともに、グランドピアノもあり、ジャズ喫茶の雰囲気を楽しむことができる。

担当者は「ジャズの街・横浜の文化遺産であると同時に、近年、若者や外国人が集まる魅力ある街・野毛のランドマークとして、地域との融和を図りながら、横浜の観光振興に貢献していきたい」といい「ちぐさは創業店主・吉田衛の遺志を受け継ぎ『ジャズの歴史と伝統を大切に、それを未来につないでいく』ことを使命と考えている」とコメントしている。

展示時間-11時~19時、展示期間は2023年2月28日まで、入場無料。

ちぐさは、開業90年を迎える2023年に博物館とライブハウスの機能を備えた「ジャズミュージアム・ちぐさ」として建て替え準備中で、「Jazz Museum CHIGUSAファンド」を立ち上げ、建て替え資金の寄付やジャズの歴史的資料の寄贈を募っている。ミュージアムの完成予定は2023年3月11日。



[広告]